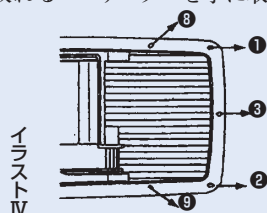
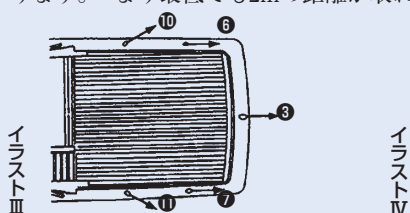


ロッドホルダーのファイティング位置とフィッシングのしやすさ

イラストⅡにおいて、ロッドホルダーの位置①は、⑦のリールを巻く人の邪魔にならない範囲A(800mm)程度が適当です。⑦の位置は、リールを巻き上げた時、ロッドをロッドホルダーから抜かなくても、リーダーに手が届く範囲Bということになります。通常Bの距離が600mm、Aの距離を800mmにします。この場合、さらに①でリールを巻く人がデッキスペースを取ります。このスペースCを600mmと考えると、全部を合計してコクピットのレール長は2m必要になります。つまり最低でも2mの距離が取れる

ボートは、フィッシングのしやすいボートといえるわけです。ここでの問題は、イラストⅠの①②と、イラストⅡの②の位置へのホルダーの取り付けです。この取り付けは、コクピット(アフターデッキ)の狭いボートで、ホルダー①を取り付けた場合のみに限られます。それ以外の場合は、この位置へのフィッシングは避けるべきです。この位置にフィッシングした場合は、ラインを取るためのフックのようなものを用いると、ロッドをロッドホルダーから抜かなくても、リーダーを手にとることができます。

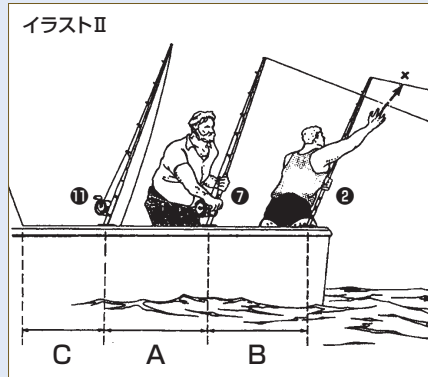


◀コクピットの大きさによるロッドホルダーの取り付けポジションは、イラストⅢ、Ⅳを参考にしてください。

ポールタイプのロッドホルダーの利用

コクピットのレールのトップに手摺などが付いているボートでは、埋め込み型のロッドホルダーのフィッシングが適当でないケースもあります。ロッド&リールをセットしてみたら、リールのハンドルが手摺に当たって操作ができないというような

状態になることがあります。このような場合は、無理に埋め込み型のロッドホルダーをフィッシングするのではなく、むしろ手摺を積極的に利用することをお勧めします。そのために用意されているのが、ポールタイプのロッドホルダーです。



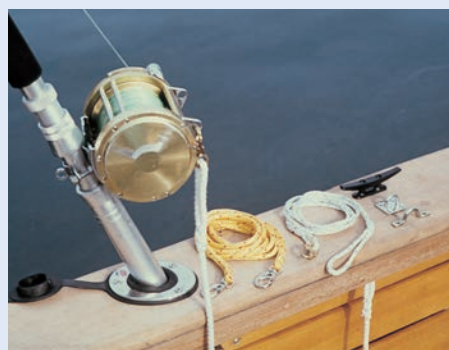
◀手摺のポールにセットしたロッドホルダー

ロッドセイフティー・システム

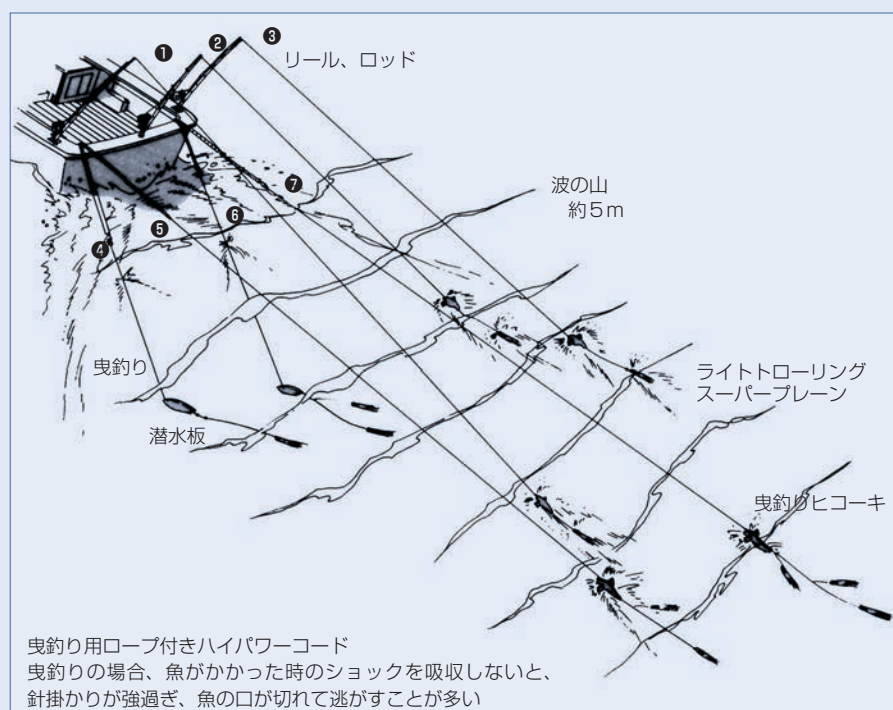
ロッド&リールが海に落ちないように、ロッドホルダーとベアーで使用するのが、ロッドセイフティー・システムです。このシステムは、ワンタッチ金具にセイフティーライン、ボート側に取り付けたクリートやアイから構成されています。ロッドを素早くホルダーから外すことができ、邪魔にならないようにセットすることが可能です。

ワンタッチ金具でスムーズに素早く着脱できます。また、セイフティーラインを取り付けたままでもブレいできるように、1.5m~3m程度の長さ(コクピット中央まで移動できる長さ)にしておくといでしょう。

▶魚をランディングする時も邪魔にならないシステム



ロッドホルダーを利用したトローリングと曳釣り例



曳釣り用ロープ付きハイパワーコード
曳釣りの場合、魚がかかった時のショックを吸収しないと、針掛かりが強過ぎ、魚の口が切れて逃がすことが多い

①②③はトローリング、④⑤⑥⑦はヒコーキや潜水板を使用した曳釣り仕掛けです。注意しなければならない点は、フィッシングのしやすさです。①と⑤、③と⑦は両方一緒に流すとラインが絡みます。つまり、①を流す時は⑤は流すことはできません。④と①、⑤は両方同時に流すことが可能です。④は水深3~8mの位置に沈み、ラインの長さも短いからです。

②に曳釣り仕掛けを流してもよいでしょう。ラインを出す距離は両側の①や⑤、③や⑦より長くても短くても大丈夫です。②をヒコーキによる曳釣り仕掛けにし、①と③でトローリングを楽しむならば、集魚の目的でラインを少し長めに出すのがベストです。そして②に魚がかかったら、トローリングを楽しむためそのままの状態にしておくことと集魚の効果があります。

②から潜水板による曳釣り仕掛けを流すなら、両側の④と⑥はラインが絡まるため流せません。ラインが絡まったり、仕掛けがオマツリしたりでは、フィッシングを楽しむどころではなくなってしまいます。また、フィッシングに気を取られて、ボートの操船がおろそかになるようでは困ります。トローリングや曳釣りを楽しむためには、他船や障害物に十分注意して、安全な走行をこころがけることが重要です。